OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	男娼のセクシュアリティの再考察 ： 近代大阪における男娼像の形成とコミュニティの変遷
Author(s)	鹿野, 由行
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2015, 49, p. 37-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61356
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

男娼のセクシュアリティの再考察

──近代大阪における男娼像の形成とコミュニティの変遷──

鹿野　由行

キーワード：男娼／釜ヶ崎／大阪／ゲイ／セクシュアリティ

1. はじめに

本稿の目的は戦前戦後の男娼と呼ばれる、男性客を相手にするセックスワーカーについて、大阪を中心にセクシュアリティとコミュニティの業態を明らかにすることである。男娼とは売春をする男性であり、性的サービスを提供し金銭を享受するセックスワーカーである。服装は、洋装や和装、女装や男装など個人によって異なり、単独で行動する者や組織化している集団もあれば、店舗を構えている場合など実態は幅が広い。

現在、男娼の定義に含まれるものとして、主にゲイ（バイセクシュアル）男性客を対象に男性がセックスワーカーとして働く「売専（ウリ専）」や、「ニューハーフ・ヘルス」などと呼ばれる女装者やトランスジェンダー（MtF[1)]）が男性客の相手をする形態などがある。両者はしばしば混同して語られることも多く、ゲイ男性は「いつか女性になりたい人々」だと誤解されることもあるが、両者は異なる概念である。

「売専」[2)] はゲイ（バイセクシュアル）男性、「ニューハーフ・ヘルス」はトランスジェンダー（あるいは女装者）が働いており、異なるセクシュアリティを主軸に形成されている。

戦後の男娼については「警視総監殴打事件」[3)] をはじめとする「ノガミ（上野を逆読みにした符丁）」の男娼が特に有名である。戦後の上野の男娼を主人

公とした角達也による小説『男娼の森』では、大阪の釜ヶ崎を「総本山と上野の男娼は信じている」（角 1949）とあるように、当時の釜ヶ崎には日本で指折りの男娼コミュニティが存在していた。

これまでの近代の男娼研究では、第一に男娼の主流は女装（異性装）であり、第二に上野や浅草など関東の男娼についての研究が中心とされ、男装の男娼や他の地域については十分な研究が行われていない。だが本当に男娼の主流は女装であったのか。なぜそのように考えられてきたのか。本稿ではこれらの問いを起点に、戦後広く語られる男娼像や男娼のセクシュアリティがメディアのなかでどのように描かれ形成されたのかをたどり、その次に大阪における男娼の地域的特色について1920-50年代の雑誌記事から考察する。

2. 先行研究

男娼を含む男色[4)]と呼ばれる男性同士の性愛については、すでにいくつかの研究（白倉 2005、Leupp 1997 = 2014など）がある。近世の男色の特徴について神田（2013）は、一つ目に近世初期に誕生した歌舞伎と結びつくことで男色の商品化が行われ、二つ目に男色による売春は遊女による売春とさまざまな面において対蹠的にとらえられると指摘している。つまり近世になり男色は商品化され、男娼は（貫徹されたわけではないが）散娼ではなく集娼化されるようになったのである。

近代になると「同性愛」という新たな概念が登場する。後述する古川（1994）は近代以降の同性愛者像の確立についてその変遷を説明している。また、明治期の「学生男色」を中心に「男の絆」のイメージの変化を女学生の登場などを踏まえ明らかにした研究がある（前川 2011）。

近代以降の男娼と呼ばれる（女装を含む）男性のセックスワーカーについては、三橋順子による先行研究がある。女性の買売春については女性史研究における様々な蓄積があるものの、男娼を含むセクシュアルマイノリティーを対象とした研究は未だ少ないのが現状である。その理由として、異性愛風

俗と比べて資料が圧倒的に不足していること、そしてゲイ（バイセクシュアル）男性向けセックスワークやゲイバーなどが学術研究からの関心を向けられてこなかったことも無関係ではないだろう。

三橋は、歴史的な男娼の主流とは「身体的男性が女装して、金銭の対価として、男性相手に性的サービスを行う」ものであったが、従来これらの女装男娼は男色や男性同性愛の文脈で語られてきたと指摘し、異性愛的関係を読み込むべきだと主張する（三橋 2008a）。

近代日本の「悩める同性愛者」の誕生について、古川誠（1994）は「男色」「鶏姦」「変態性欲」という三つのコードを用いてその歴史的変遷を説明している。前近代の同性愛観を象徴する男色コードにおいて、「かげま」と呼ばれる歌舞伎役者の女形を中心とした男娼は男色の下位類型として位置付けてられており、その後の時代の変容とともに男性同性愛の文脈に組み込まれていった。古川は、明治期に導入された「鶏姦」（肛門性交）という行為の禁止によって否定的な評価が下され、1920年代以降の性欲学における「変態性欲」という同性愛の病理化を経ることで、行為と性的アイデンティティが直結して個人の内面に埋め込まれていったと指摘する。これに対し、三橋（2005）は異性装を伴わない男色、異性装を伴う男色というジェンダー的枠組みを重視した二つのモデルを提示し、両者を分けて考える必要性を主張している。

三橋（2008b）は女装男娼のセクシュアリティについて、客との行為とその関係性に着目し、（1）男娼の性的サービスが完了した後も女装の男性であることに気付かない者、（2）事前の交渉、あるいは性的サービスの途中で女装の男性だと気付く者、（3）最初から女装の男性だと承知して買う者、の三つに分類する。（1）は男娼の女性擬態が完遂されており、ヘテロセクシュアルな意識に基づく関係性として位置付けられている。次に（2）、及び（3）内の女装者愛好男性が買い手のケースについては、「擬似ヘテロセクシュアル」[5]な関係であり、男性同性愛的関係ではないという。さらに1950-60年代に活躍した男娼たちによる複数の語りから、確率的にも（1）+（2）は女装男娼（全体の七割）を「女だと思って遊」んでおり、（3）の内の男性同性愛者

は一割程度であろうと推測している。

三橋による一連の研究は、日本のセクシュアリティ研究においても極めて重要な意味を持っており、「擬似ヘテロセクシュアル」という男娼－客の行為／関係性への徹底した着目は実に興味深い。三橋は論文の中で従来の認識が身体本質論に立つ為、ジェンダー意識を軽視していると指摘している。しかし、客と男娼という両者の関係性を「異性愛」と呼ぶことは果たして妥当なのか、という疑問は拭えない。行為／関係性を重視するあまり、男娼は繰り返される性行為の中で、常に相手（客）の判定によってセクシュアリティが承認され続けなくてはならないという、不安定なセクシュアリティであるかのような印象を受ける。論考のなかで依然として男娼自身のセクシュアリティについては十分明らかにされているとは言い難いように思える。この点については次章で言及する。

次に男娼のコミュニティについてである。三橋（2006、2008a）はゲイバーや男娼といった戦後東京の「男色文化」について、1950年代までは上野、有楽町、新橋、新宿、立川などに女装男娼のグループがあり、1960-70年代にかけて非女装の「ホモセクシュアル系ゲイバー」が（東京都新宿区）新宿二丁目に集中しゲットー化したのに対し、「ニューハーフ」を含む「女装系のゲイバー」は新橋・銀座・赤坂・六本木と山手線の内側に成立した新興の盛り場に沿うように展開し、両者は分離していったという。

新宿二丁目への集中化については、伏見憲明（2004）を参照する。それによると、1958年4月1日の売春防止法の完全実施に伴い「赤線」（公認売買春地区）が廃止され、赤線であった色街の新宿二丁目が衰退したことでゲイバーが進出したことが始まりだという。

しかし、大阪には大阪市北区堂山町、浪速区新世界、中央区難波などのゲイバー密集地[6)]があるが、いずれも新宿二丁目のような旧赤線ではない。大阪には東京とは異なるコミュニティの形成とそれに伴う分化があったと考えるべきである。本稿では大阪の地域性に着目し、どのような変遷があったのか考察し、大阪の特異性についても明らかにする。

3. 男娼のセクシュアリティとジェンダー

3-1. 男娼の多様性

戦後、上野の男娼について書かれた小説『男娼の森』（1949b）の作者である角達也は、創作ノート「男娼の世界」（1949a）の中で男娼の傾向を以下の三つに分類している。[7)]

①絶対に女と思われたい、女姿にほれられたいもの
②情夫の洗濯をしたり連子の世話をして女のようにやさしいということでほれられたいもの
③女装は生活の方便、かつらを脱いで同性愛でほれられたいもの

それぞれの特徴について、①は「自分を女だと思い込む幻想の時にのみ、性欲は燃えるもの」であり、相手が満足することで「性興奮して射精」する。②は「情夫と同棲生活をして、生涯をかけたような愛情で暮らす」が「長つづきしない」ために「浮気にみえる」という。だが、③の「同性愛のみの性倒錯」と「男娼の客になる男性の心理」については説明が難しいとして記述を避けており、また「男娼のノーマルな性生活」や「更生方法」についても不明だという。「ノーマルな性生活」を送る者とは、異性愛者であるが生活の糧としての金銭を得るのために男娼となった者だと考えられる。

女性との「ノーマルな性生活」をおくる男娼について説明が難しいと避けているのは、古川（1994）が述べる「変態性欲」コードにおける性行為とセクシュアリティの直接的結び付きが、角の内部にも強く存在していることのあらわれであろう。異性愛主義を前提に男娼を理解しようとしているのではないだろうか。男娼とは男性を愛し性行為をする「同性愛」者（性倒錯者）だと規定しているために、「ノーマルな性生活」を送る異性愛者（両性愛者）である男娼について説明を避けていると考えられる。なぜ角は「同性愛のみ」の「女装しない性倒錯者」についても説明を避けたのだろうか。その理由として「母になることのできない女。子供の産めぬ女心の男體。僞女。僞男。オ

カマ。子供の産めぬ不具な人間。――お富の頭のなかを走馬灯のように、母という文字が駆けた」（角 1949a: 95）とある。このような、男娼を「女」性や「母」性と積極的に結びつけるまなざしが、男娼文学の作者として知られていた角に存在していたことは男娼像の形成に大きな影響を与えたと考えられる。

上野には、今日のトランス・ジェンダーに近い性別違和をもつ者、職業として女装をする男性同性愛者、職業として女装をする男性異性愛者、分類からは漏れているが「女装しない性倒錯者」（角 1949a: 59）など多様な男娼が存在していたのである。

3-2.「男娼」という「変態」

現実の男娼の多様性とは裏腹に、女装的な同性愛者という男娼像はいつ形成されたのだろうか。

1937年3月31日の『東京日日新聞』の写真特報には、東京・銀座で私服刑事の袖を引いて逮捕された着物姿の女装男娼の記事が、写真とともに掲載されている。「これが男に見えますか」と、女性らしさを強調する文が見出しに書かれている。1920年代後半から30年代後半にかけ、新聞の社会面にはこのような女装男娼が登場するようになる（三橋 2008a）。

1920年以降同性愛は「変態性欲」として位置付けられたことはすでに述べたが、この1920年前後は「通俗性欲学」が成立し、セクシュアリティ言説が通俗化され、一般大衆を含め流布する時期である（赤川 1999）。当時の性欲学者である澤田順次郎と羽太鋭治による『変態性欲論』（羽田・澤田 1915）では、男性同性愛的関係を指す「男性色情」、女性的な男性である「女性的男子」、女装を行う「「女化」男子」の順でより変態性が増していくと考えられていた。つまり最も「変態」な存在の一つとして「女装」が位置づけられていたのである。

雑誌『犯罪科学』には1930年頃に浅草で活動していた「新東京陰間團」という男娼組織について記されている。[8)] 記事によると、「美少年の部類に入」

る「安っちゃん」という男姿の20歳の若者と、一見すると「醜悪な」53歳の「お爺さんのかげま」が書かれている。53歳のかげまが客に人気があるという話の中で、「變態者には、常識的に見て醜悪なものでも、醜悪にならないからね。寧ろ、その醜悪が一層誘惑的に迫って来る場合があると見える」（森田 1930: 130）と、その変態性をより強調するのである。

三橋（2008b）は50余人のかげまを抱える「新東京陰間團」を「非女装の男娼組織」だとみなしているが、記事では「特に目立った變態」として「近所のかみさん連中もすっかり女だと思ひ込」む「お秋さん」と呼ばれる27歳の女装のかげまについても書かれており、組織は多様であったようである。

1932年の大阪・飛田の男娼について書かれた記事「男に媚を賣る男」には当時の男娼の姿が書かれている。「髪の水を水々しく油で光らせてオールバックにし、もっとも揉み上げだけは出来るだけ長く延ばして、顔へはべったり白粉をつけ、唇は洋紅で染め、人絹か錦紗か、いづれにしても派手な女の柄の着物をぞろりと着て、三味線を逆さまに抱へて、いやに身體にしなをつけて笑って見せる中年の男」（森野　1932：217）。男娼の姿を見ると大概の男は「吐気を催さずにはゐられない」と説明し、四十五歳といふ禿頭の太ったおやぢ」が男娼仲間に「あの子」や「××ちゃん」と女性的な呼称を用いられることについてやや呆れた様子で書かれている。だが、記事の後半では「おきよ」という42歳の男娼の半生について記され、「田舎の年増藝者」のようで「小意気に思われる」と紹介している。ここでは「女の柄の着物」を着て女装する醜い「おやぢ」と、「小意気」な「藝者」風の「おきよ」という相反する二つの男娼像が描かれている。

これらの記事が現実を脚色している可能性は否定できない。しかし注目すべきは特に「変態な」者として自身を「女だと思ひ込」むような女装男娼が強調されつつも「美少年」の男娼が描かれ、また一方で醜い「おやぢ」や「お爺さん」など「吐気を催さずにはいられない」男娼など、1930年代までは複数の男娼像が描かれていることである。

精神医学者の南孝夫は1948年上野の男娼の調査から、女装は「彼等にとっ

て有力な武器」であり、「経済的理由」を含めこれまで困難であった「男を得る」という「目的」を簡単に達することが出来るのであり、それらを可能にしているのは「終戦後の世情の変異」だと結論づけている（南 1948）。南や先述の角の報告からは、敗戦後社会の変化に伴い生活のために女装（男娼）を行う者の増加が読み取れる。

三橋（2008b）は女装男娼が主流であった理由について、集客における女装の商業的優位性を挙げている。しかし、詳しくは別稿に譲るが、南の指摘をふまえるならば、敗戦という転換点は看過してはならないだろう。

1920年代の「変態性欲」の流布以降、性欲学に裏打ちされる形で男娼を含む同性間の性的関係を持つ者は、「変態」というカテゴリーに分類された。その後現実の多様な男娼のあり方とは裏腹に、男娼は女性性を根底に＜美しさ／醜さ＞が繰り返し強調され、「変態性欲」としての男娼像が形成されていった。そして敗戦後の1940年代後半には「経済的理由」を含め女装男娼が増加した。その後、男姿の男娼は注目されなくなり、より「変態」とされる女装男娼が主流となったのだと考えられる。

3-3. 男娼のセクシュアリティとは

ここでは男娼のセクシュアリティについて他者（客）との関係から考察を深めていく。三橋は男娼のセクシュアリティついて「擬似ヘテロセクシュアル」を含めた異性愛的な関係性を読み込むべきだとする。この指摘は極めて興味深い。しかし、すでに述べたように当事者の「「女性として」営業していた」という語りの強調や、自身の経験を踏まえつつ「俺にとってお前（順子）は女なんだから、女のお前を抱いても、俺はヘテロなんだ」（三橋2008b: 144）という男性客の主張からは、男娼のセクシュアリティは最終的には客である他者が性的サービスを通して決定しているかのような印象を受ける。男性異性愛者によって「女性として」扱われるという女性ジェンダーの承認を介すことで、（擬似）ヘテロセクシュアルであると認識されるわけである。

この理論は異性装者である男娼と客の性的関係、三橋の言葉を借りるなら

ば両者の「共同幻想」を最大限保つことで成立する。そのための前提として、異性装者である男娼自身が「女性として」のジェンダーを付与されることを認め、受け入れなくてはならない。仮にジェンダーの付与を受け入れたとしても、繰り返し行われる性行為の中で常に相手（客）の判定によって承認され続けなくてはセクシュアリティはその根拠を失うことになる。つまり、男娼のセクシュアリティとは行為による「共同幻想」の成功によってのみ保たれる不安定なセクシュアリティだとさえいえる。しかしセクシュアリティやジェンダーとは他者によって承認・決定されるものなのだろうか。三橋は客との関係性を「擬似ヘテロセクシュアル」と述べているが、それは二者間におけるセックスファンタジーに近いものであり、男娼が自認する男娼自身のセクシュアリティとは別物だととらえるべきだろう。

戦後の上野の男娼について角は、「驚いた事には完全な女装をしていなくて途中で男である事が暴露しても、淫売であるという意思表示さえしていれば、客はいくらでもつくのであった」とし、客は男娼に対し女性性というよりは性のはけ口としての「淫売」を求めていた節もあったようだ（角 1949b: 49）。また、1963 年のインタビュー「男色会見記」には、終戦後の混乱期の上野には「女性と間違えた人も多」いとしながらも、「知識も普及」し「今では、最初から男ということが分かっていて、納得ずくでつきあってくれる人の方が、多くなってきた」と語っており、客は女性ではなく男性あるいは女装の男娼を求めていた様子が伺える（吉行 1963: 35）。

戦後、雑誌や小説など様々なメディアで男娼についての記事が書かれ、上野の森など男娼の存在は広く世間に知れ渡ったことは間違いない。当初は異性愛男性客の性欲のはけ口であり、「女性と間違え」られるいわば女性の代役であったが、男娼が認知されるに伴い女装者愛好者が集まりつつあったと考えられる。また当時の時代状況を考えれば、性行為の相手を探すことが難しい男性同性愛者が、広義の同性愛として異性装者の男娼に対し性愛を求めて訪れたことも十分考えられる。

異性愛的「共同幻想」を維持した「擬似ヘテロセクシュアル」的関係や、広

義の同性愛的関係など、男娼に対しそれぞれの客が求める性愛の形は異なっていたのである。

釜ヶ崎の男娼の親分であった上田笑子は「男娼にとっていちばん大切なのは、キャー（客）が何を求めているかをすばやく感知することやネ（…略…）あたしらは、女役と男役の両刀使いができんとあきまへんのや」と、男娼には臨機応変な対応が求められたと語る。[9)] すでに見たように、上野や浅草には「同性愛」的傾向を持つ「性倒錯」な男娼だけではなく、私生活においては女性と性行為を行う異性愛的（両性愛的）な者や、日常生活を女性として過ごす女装者、男性として生活する者など男娼のセクシュアリティは実に多様であった。

男娼は客が求めるジェンダーやセクシュアリティを「すばやく感知」し、「共同幻想」というファンタジーとしての性的関係の中で柔軟に構築していったのである。これまで、行為としてのセックスとセクシュアリティが直結して考えられてきたために、関係性や行為によって男娼のセクシュアリティが規定され、男娼自身のセクシュアリティは曖昧なままとされてきたのである。

4. 大阪の男娼コミュニティの変遷

4-1. 男娼の「女王」

以上、3 章では男娼が主流とされた過程と、男娼のセクシュアリティの多様性について明らかにした。4 章では、大阪における男娼のコミュニティの変容について検討する。

大阪の男娼のコミュニティについて簡単に記述したい。角達也は男性同性愛者や男娼を指す「オカマ」という俗称の由来について、「上野の男娼たちは釜ガ崎の頭文字から出た呼び名だと信じて」おり（角 1949a: 61）、男娼は「大阪の方が本場」（角 1949b: 49）だと目されていたという。

釜ヶ崎とは現在の大阪市西成区萩ノ茶屋一帯の寄せ場をさす。本稿では詳

しく触れないが、従来の釜ヶ崎研究では1903年に開催された第五回内国勧業博覧会や、その後の発展に伴うスラムクリアランスによって人々が移り住んだ先が「釜ヶ崎」であったとされている。しかし、地理学者の加藤（2002）は従来の研究を批判的に検討し、「釜ヶ崎」は1900年代の都市政策が複雑に偶然的に絡み合うことで創出された木賃宿街だと指摘している。

大阪を含む上方は、江戸時代より男色の先進地であり供給地とされてきたが（白倉2005）、1900年以降に成立した釜ヶ崎が男娼の「本場」と目された理由について1923年の関東大震災によって生活の場を失った男娼が大挙して移動したのがはじまりだという（角1949a）。昭和11年（1936年）の釜ヶ崎にはすでに300人程の「オカマ」が存在しており、出没しだしたのはその10年ほど前だとされている（郡1969）。人口動態を見ると、関東大震災以後東京市を離れ郊外への移住者が増加したが、その一方で大阪市の人口は1920年の138万人から1930年には245万人まで増加し、1932年まで国内で一番人口が多い市となっている。[10] 大震災後に「オカマ」が出没しその約10年後の1936年に男娼が急増したという記述と、無関係ではないだろう。男娼の「本場」釜ヶ崎とは、中世より続く男色の系譜に連なるものとしてとらえられていたわけではなく、近代に形成されたものであった。

当時の男娼コミュニティはどのようになっていたのだろうか。その手がかりとして、上田笑子という後に釜ヶ崎の男娼の大姉御となる人物を取り上げる。上田については三橋（2007）の研究をもとに確認していく。上田笑子（本名、上田鹿蔵）は明治43年（1910年）に奈良県で生まれ、12歳の時に家出して大阪へ、13歳から「その道ひとすじ」の、「飛田のエミちゃん」として飛田に知らぬ者はないと言われた「男娼の女王」である。[11] 昭和33年（1958年）には、「この道を切り開いて二十余年。彼女のシマを“おかまスクール”と呼ぶ」と紹介される草分け的存在である。[12]

大阪の男娼界隈の重鎮とされている上田だが、16歳の時に東京の上野公園で取り調べを受けている。『風俗奇譚』[13] 1965年7月号では戦前の男娼について複数の雑誌や新聞記事が紹介されている。記事によると、上田と井上林

八（40）と渡辺芳雄（25）の3人は、上野公園で井上が見張りを行い、男性客を見つけ、渡辺と上田が男性客を相手に性的満足を与えて金銭を受けとっていた。[14]「うら若い美人ふたりと男ひとり」と紹介されており、「男」とは井上で、「うら若い美人」とは上田と渡辺だと推察されるが、上田はすでにこの頃から女装していたようだ。記事によると上田は15歳の時に井上と大阪の中之島公園で知り合いとなり、一儲けしようと東京に来たのだという。

上田は12歳で家出した後、釜ヶ崎の下駄屋の主人に囲われて生活していたが、関係が明るみになり追い出されることになる。そして13歳の頃、ひとりで釜ヶ崎の男娼のたまり場「ヨシノ屋」に行ったという。当時の男娼の様子について「その頃のオカマはんはみな男装で、女装したんは、あたしが初めて」であったと述べている。[15] 初の女装男娼であったかどうかは疑わしいが、大阪の女装男娼の草分け的存在であるだけではなく「東京の男娼の八割がたはウチの出」だと豪語し、卒業した男娼は全国4000人はいるという。

『新世界興隆史』（徳尾野 1934）によると大正9年（1920年）頃から飛田と新世界の間にある石見町は「漂客相手の法界屋が盛んに出入りして、大いに男娼的雰囲気を醸し出」していた。法界屋とは、月琴や三味線などを持ち法界節などを唄う巷間の門付け芸の一つである。昭和初期の新世界や飛田の「変態性欲者」について、「顔へペツタリ白粉をつけ、中には眉を引き口紅までさして、紋服をゾロリと着流し三味線や鼓を抱へて二三人連れ立つて、女よりもずつと女らしい嬌態を作つて盛り場を臆面もなく流し廻」っていたとある（岸本 1932）。上田の述べる「みな男装」であったのは紋服のことを指すのか定かではないが、男物の紋服を着流し、化粧や女性らしいしぐさ、という曖昧さが彼らをより「変態」な「嫌味な存在」に見せていたと考えられる。

三橋（2008b）は昭和10年（1935年）には大阪で女装男娼の組織化が始まっていたと指摘しているが、おそらく東京から戻った上田もそれらに関与していたと考えられる。その後、上田は「おかまスクール」や「男娼道場」[16] と呼ばれる男娼コミュニティを組織していったのである。

4-2. 商業戦略としての分化

日本のゲイの歴史に詳しい伏見憲明（2004）によると、日本で最初に男装をした「男」ジェンダーを欲望する男たちに出会いを提供する今日の「ゲイバー」の原型は、昭和 30 年（1955 年）に東京・銀座に存在した「ブランスウィック」だとされている。また当時のゲイバーは売買春の営業も兼ねた商売であり、店で働く「ゲイボーイ」は店員であり男娼でもあったという。

では大阪の同性愛に関連する店舗はどのようになっていたのだろうか。1958 年の雑誌記事によると、大阪には 25 軒のゲイバーや女装男娼の店があったとされている。そのうち 22 軒が男装を基本とする「ゲイ・バア」や「ゲイ・スタンド」と呼ばれる店であり、3 軒が女装男娼の店舗であった。[17)] 店舗数の割合に対して記事のほとんどは女装男娼へのインタビューなどが書かれていることをみると、男装の店舗に取材が偏っていたわけではなく、主な読者である異性愛者を意識してより「変態」な女装男娼を取り扱ったのではないかと思われる。

記事によると、1950 年代後半の大阪には新興勢力である男装のバーが 25 軒中 22 軒と急増し、女装男娼たちは対応を迫られたようである。その一つとして、大阪のバアでは東京と異なり、「一切女装が許されない」暗黙の掟があるという。掟を破ると酷い制裁が加えられたようで、東京の銀座のゲイ・バア「青江」で働いていた「美代子」は、掟を知らず大阪の街に出たところ「オヨネさんという鉄火肌の男娼に髪をザックリ」切られたと書かれている。

1952 年の日本全国の男色事情について書かれた記事によると、当時の大阪には 2 種類の男娼が急増したことが記されている。[18)]「プロ男娼」は「大部分が女装で、しかも関西好みにコッテリと厚化粧に服装も毒々しいまでに派手」であり「男娼であることに矜持？をもっている」とされている。もう一つは「ノン・プロ男娼」であり、「すべて男性として行動し」「女性的に見られぬよう注意している」。「ノン・プロ男娼」は主に公園や映画館で相手を探していたとあるが、「プロ男娼」も飛田遊郭近辺や新世界界隈の他に天王寺公園や中

之島公園で客を探しており、一部の活動場所は被っていたようだ。[19)]

「ノン・プロ男娼」は、女装ではない、あるいは金銭の取引がないために、掟の制裁対象外であったと思われるが、いずれにせよ大阪ではみだりに女装することは許されていなかった。掟が作られた理由について、「戦前から商売をいとなむ男娼たちが、自己のシマを守るため、新興風俗として出て来たゲイ・ボーイたちから勝ち取ったもので、〝男娼以外はみだりに女装しない〟という暗黙の一礼」だとされている。大阪では、戦後急増した「ゲイバー」やあるいは「ノン・プロ男娼」と呼ばれる男装の同性愛者を明確に意識する形で、「女装」という行為を女装男娼が独占するようになる。それは戦前から続く大阪の釜ヶ崎を中心とした、女装男娼コミュニティの行った商業戦略であった。

戦後大阪の男娼は男装／女装という服装のジェンダーに基づく分化が行われた。女装を行う者は「（女装）男娼」でなくてはならず、女装というジェンダーに深く関連する行為そのものが職業に強く結び付けられるのである。「ゲイバー」や「ノン・プロ男娼」などの出現により、男装の男性同性間の性的関係は女装男娼とは明確に分化・独立した。この当時、大阪の女装を含む男娼たちの活動場所が重なるところも多かった為に、掟による分断が必要とされたのだと考えられる。分化と独立の要因は、東京「新宿二丁目」にみられる売春防止法以後のゲイバーのゲットー化とそれに伴う分離などではなく、「女装」男娼によるいわば権利の独占だったのである。

5. おわりに

本稿では、大阪の男娼について考察するために、まずこれまで主流とされてきた女装の男娼イメージがどのように形成されていったのかをたどった。1920年代以降普及した「性欲学」の影響から、男娼は女装者であり同性愛者であり美しさ／醜さの二面性を持つ「変態」とされたが、現実には男装者や異性愛者など実に多様な男娼のあり方が存在した。そして男娼という仕事の

中で客のセクシュアリティや欲望に応じ、性行為における「共同幻想」とも呼べるファンタジーを柔軟に構築していた。

男娼の本場と語られた大阪・釜ヶ崎は1900年代に偶発的にできた地域であり、当時の男娼とは法界屋と呼ばれる化粧をした女装に近い者たちであった。その後、関東大震災によって人口が急増し、昭和初期には上田笑子などを筆頭に組織的な女装男装のコミュニティがつくられていく。

しかし戦後になると、大阪では女装という行為を女装男娼にのみ限定するという掟がつくられ、「ゲイバー」の従業員や「ノン・プロ男娼」と呼ばれる男性同性愛者たちと、従来の女装男娼という、ジェンダーを基準にした分化と住み分けが行われる。それは「ゲイバー」という新興風俗から「女装」という行為を独占するという大阪独自の動きであった。

非女装の男性同性愛者と、女装者のコミュニティは現在でも分裂状態にある。しかし戦前あるいは1940年代には男装と女装の男娼は同じ「変態」という一つのカテゴリーに含まれていた。三橋は東京の「ホモセクシュアル系と女装系の分離」について、赤線の廃止や地理的要因による東京の「新宿二丁目」を中心とする男性同性愛者の集まるゲイバーのゲットー化と、それに伴う分離を指摘しているが、大阪は両者の活動場所が重なるがゆえに既得権益の独占として掟による分化が行われたのである。

セクシュアリティの議論に立ち戻ると、戦前戦後の男娼たちにとって、女装をして男性と性的関係を持つことは自身のジェンダーやセクシュアリティとは必ずしも結びついていなかった。無論、今日のトランスジェンダーに近い者や同性愛者もいたかもしれない、しかし金銭を得るための手段であり男性ジェンダーを持ちながら女装をしていた者も存在していた。

明治期の「鶏姦」の禁止によって行為が同性愛と結び付けられて以降、現在の私たちは異性装や性行為者同士の性別など行為と関係性から、個人のセクシュアリティやジェンダーと直結させて推測してしまっているように思われる。

前川（2014）は戦後の既婚ゲイ男性が「異性との結婚」と「同性との交際」

の両立を図ろうとしていた事について雑誌分析を行っているが、既婚のゲイ男性というあり方はまさにセクシュアリティの違和感を体現しているといえるだろう。このように行為／関係性を分けた実践はこれまで日常の中で繰り返し行われていたし、また現在も行われているだろう。セックスワークという職業について考えても、現在「ウリ専」と呼ばれるゲイ男性向けのセックスワーカーとして働く異性愛男性について同様の議論が可能である。繰り返しになるが、本稿で見た男娼を始め行為／関係性とセクシュアリティは分けて考える必要があるだろう。法と病理化の中で作られたセクシュアリティや、ジェンダーという性概念だけでは性行為や欲望を十全に語ることができないのではないだろうか。

［注］

1） Male to Femaleの略。自身の性を男性から女性へ移行した人、または移行したい人。
2） 売専で働く者（ボーイ）には異性愛男性も多い。しかし、「――専」そのものが「ゲイカルチャーに属す」用語であり、売専はゲイ文化から生まれたものだとされている（北夙川 2004）。
3） 1948年11月22日、上野の森で大規模な風俗取締が行われた。その際、視察中の田中栄一警視総監一行に随行していたカメラマンが、街娼を無断で撮影したため男娼たちともみ合いになり、警視総監が殴打され帽子を奪われた事件。その後警察は取締を強化し、12月には上野公園は夜間立ち入り禁止となる。
4） 男性との性的関係を示す。同様に女性との関係は「女色」と記される。しかし、「女色嫌い」、「男色、女色のへだてはなきもの」という言葉が示すように、行為や関係性（の好み）を示しまた両立するものであり、個人の属性がどちらかに割り振られるといったものではなかった。
5） 「擬似ヘテロセクシュアル」について「身体的な男性が女性を擬態（女装）していることを承知の上で、男性と女装者との間で、当事者の共同幻想として成立する男「女」関係」だと定義付けている（三橋 2008b）。
6） 『男街マップ　2012-2013』（海鳴館、2012年）より。
7） 常連で300人程の街娼が徘徊しており、「女装しない性倒錯者」や「売淫で生活を稼ぐ必要のない趣味」の男娼は100人ほどいた、と記されている。
8） 三村徳蔵「新東京陰間團」『犯罪科学』1930年7月、pp.127-133.

9）「衝撃の告白　44」『週刊ポスト』1970年12月25日、pp.164-168.
10）総務省統計局資料より。
11）「61歳でなお稼ぎまくる関西男娼の女王ぶり」『週刊現代』1969年10月（通号不明）、pp.146-147.
12）「大阪の特殊女性美人ベストテン」『増刊・実話と秘録：風俗読本』1958年1月、pp.1-4.
13）1960年創刊。異性愛向けのSM記事を中心に、ゲイ、レズビアン、女装など当時のアブノーマルとされるものを複数取り扱った風俗雑誌。商業誌として初めて男性同性愛の特設コーナーが作られるなど、後のゲイ文化に大きな影響を与えた。
14）鎌田意好「異装者と異装心理の実態」『風俗奇譚』1965年7月。引用記事についての詳細が不明だが、上田の年齢から1926年頃だと推測される。
15）「衝撃の告白　44」（注9と同じ）
16）同上
17）八杉文衛「ゲイの本場　大阪の美人男娼ベストテン」『増刊・実話と秘録：風俗読本』1958年1月、pp.102-113.
18）「男色社交場」『人間探求』1952年8月、pp.46-55.
19）「ノンプロ男娼は、相手と情を交しても、その間に金銭の取引がない」という表現からもわかるように、「男娼」という職業本来の「性的サービスを提供し金銭を享受する」のではなく、「男娼」とは「変態」であり「男性と性的関係を持つ」いわば「男性同性愛者」とほぼ同義であると考えられていたことがわかる。

［参考文献］

加藤政洋，2002,『大阪のスラムと盛り場　近代都市と場所の系譜学』創元社.
神田由築，2013,「江戸の子供屋」『シリーズ　遊郭社会1　三都と地方都市」吉川弘文館.
北夙川不可止，2004,「――専」『性の用語集』講談社，130-134.
郡昇作，1969,『日本の玄関　釜ヶ崎』，自費出版.
白倉敬彦，2005,『江戸の男色　上方・江戸の「売色風俗」の盛衰』洋泉社.
角達也，1949a,「男娼の世界」『世界評論』4（2）、世界評論社、pp.59-65,95.
――――，1949b,『男娼の森』日比谷出版社.
伏見憲明，2004,『ゲイという［経験］増補版』ポット出版.
古川誠，1994,「セクシュアリティの変容：近代日本の同性愛をめぐる3つのコード」『日本女性ジャーナル』（17）: 29-55.
羽太鋭治・澤田順次郎，1915,『変態性欲論』春陽堂.
前川直哉，2011,『男の絆――明治の学生からボーイズ・ラブまで』，筑摩書房.
――――，2014,「1970年代における男性同性愛者と異性婚――『薔薇族』の読者投稿か

ら」小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』東京大学学術出版会.
三橋順子，2005,「トランスジェンダー・スタディーズの現状と課題」『日本におけるセクシュアル・マイノリティ・スタディーズ―戦後日本〈トランスジェンダー〉社会史Ⅷ』，中央大学矢島研究室.
――――，2006,「戦後東京における「男色文化」の歴史地理的変遷――「盛り場」の片隅で――」『現代風俗学研究会』12，現代風俗学研究会東京の会，1-15.
――――，2007,「大阪の「男娼道場」主、上田笑子（1950 年代～ 1970 年代）（日本女装昔話第 34 回）」『ニューハーフ倶楽部』8 月号，三和出版.
――――，2008a,『女装と日本人』講談社現代新書.
――――，2008b,「女装男娼のセクシュアリティ」『性欲の文化史Ⅰ』講談社，127-161.
南孝夫，1948,「男娼に関する 2，3 の精神醫學的考察」『日米醫學診療ダイジェスト』3（4）: 18-24.
Leupp, Gary P. 1997, *Male Colors: The Construction of Homosexuality in Tokugawa Japan,* University of California Press.（=2014, 藤田真利子訳『男色の日本史　なぜ世界有数の同性愛文化が栄えたのか』作品社.）

［引用記事］

鎌田意好,「異装者と異装心理の実態」『風俗奇譚』1965 年 7 月号.
三村徳蔵,「新東京陰間團」『犯罪科学』1930 年 7 月号，pp.127-133.
八杉文衛,「ゲイの本場　大阪の美人男娼ベストテン」『増刊・実話と秘録：風俗読本』1958 年 1 月号，pp.102-113.
「大阪の特殊女性美人ベストテン」『増刊・実話と秘録：風俗読本』1958 年 1 月号，pp.1-4.
「これが男に見えますか」『東京日日新聞』1937 年 3 月 31 日，p.2.
「衝撃の告白 44」『週刊ポスト』1970 年 12 月 25 日号，pp.164-168.
「男色社交場」『人間探究』1952 年 8 月，pp.46-55.

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

Reconsidering the Sexuality of Danshou
—The Transformation of Their Representation and Community in Modern Japan—

Yoshiyuki Shikano

In this paper, I discuss the community and the sexuality of "Danshou" through analyzing the transformation of representation in Osaka before and after the war.

"Danshou" are male-prostitutes who have been regarded as transgender sex workers that: 1) in general are cross-dressers (transvestites), 2) engage in sex with men, and 3) receive money for sexual service. However, previous research has not studied their sexuality when discussing "Danshou".

This research focuses on magazines, newspaper articles, and novels from the 1920s to 1960s. Some "Danshou" dressed as a man and were heterosexuals, as mentioned by *Hanzai-kagaku* and *Hanzai-kouron* magazines in the 1930s and 1940s. Since "tsuuzoku-seiyokugaku" (popular sexual science), which emerged in the 1920s, made the concept "hentai-seiyoku" (perverse sexual desire) fashionable, representations of "Danshou" in the media began to converge with the image of "cross-dressing" that emphasized their perversion.

At the start of the Showa period, the first "Danshou" group was formed in Osaka. After that, Osaka became the center of "Danshou" in Japan, but following the end of the war a sex industry started to emerge in gay bars. In opposition to that, a law unique to Osaka was created which made the act of "cross-dressing" exclusive to "Danshou".

Through the above examination, this study presents the unique regional characteristics of the "Danshou" community in Osaka, as well as shows how separate from their own sexualities, "Danshou" create a new alternative sexuality through relations with their clientele.